

14. 肝リピドーシス

食べないウサギは食べさすこと、肝リピドーシスとは？

この食滞の日和見感染の結果、免疫機能の低下にて、過去に持っている病気の感染症が症状を引き起こすことがあります。この食滞にての食欲不振は長く続くと、小腸と盲腸への水分や栄養が減少して、小腸からの炭水化物の吸収が低下すると同時に脂肪酸の合成と吸収も低下するので、肝リピドーシスと言う病気を引き起こすことがあります。また胃潰瘍になり易くなる可能性もあります。

ゆえにウサギが食欲不振の際には、栄養補給（強制給仕）が必要となります。ウサギの胃は膨張しにくいので、1日の推奨量を1日4～6回に分けて与えます。血液検査では、高血糖、肝酵素と胆汁酸の値が上昇します。超音波検査は、肝臓のエコー性の増加が認められます。

弱って食事を飲み込めない（嚥下困難）ウサギは、口からの給仕は行いません。経鼻チューブを行います。特に初回は多くは、ストレス軽減のため、鎮静鎮痛剤を必要とします。チューブを入れたら、正しい位置を確認するため、X線検査を行います。犬猫と違い、胃に入らずチューブが気道に入ることがあるからです。

うさぎのストレス軽減のため、飛び退こうとしても怪我をしないようにするためには、床に座った状態で給餌するのが望ましいでしょう。非協力的なウサギには、タオルを巻いて拘束します。注射器の先をウサギの口の中に切歯の後ろからゆっくりと挿入し、口の奥に向けて、給餌はゆっくりと行います。ウサギが一口の間に飲み込める量にします。

急いで与えると、食べ物を誤嚥したり、吸い込んでしまい誤嚥性肺炎になる危険性があるので、ウサギの頭を上向きせずに、頭と平行して給仕にすることも重要である。可能であればエリザベスカラーは避けるべきです。ウサギのストレスを増やします。呼吸困難のウサギは鼻呼吸（ウサギは編性鼻呼吸動物）をしなければならないので、経鼻チューブは避けるべきです。

食欲をそそる食べ物は重要です。干草はウサギが食べるのを促し、腸の動きを活発にし、安心感と親近感を与えます。その他の嗜好性の高い食べ物としては、摘みたての牧草、タンポポ、春の青菜、キャベツ、ケール、リンゴなどがあります。

いかにウサギ自身が食べる環境を作るか？

食欲のないウサギが少しでも食べる時間帯は、夕方から明け方の 12 時間で、ちょうど周囲が落ち着いた環境の時間です。この時間は静かな落ち着ける時間で、捕食動物のウサギは本来この時間帯が他の動物の目につきにくい時間滞なので、野生のウサギも 80%の食事をこの時間滞に食べるとの報告もある。ゆえに鎮痛剤、輸液等の治療は夕方 4-5 時頃に合わせて行うのも良いアイデアでしょう。

また食べるには温度管理が重要で、ウサギは、本来 15.5°C~18.3°C前後の温度を好むが、適切な飼育環境であれば、12°C~21°C前後まで快適に過ごすことができます。ウサギは普通低い温度は 4.5°Cまで、それ以下になると低体温症のリスク、高い温度は 30°Cまでならえられますが、それ以上になると熱射病のリスクがあります。

体温を維持する。低体温は、ショックと不十分な食物摂取の結果としてよく見られる症状です。体温は 38.5~40°Cであるべきで、最適な体温を維持することが非常に重要ですが、ウサギが温まりすぎないように注意する必要があります。うさぎは、汗をかいたりして、体温を効率よく放出することができません。主な体温調節機構は、耳の中の大きな動静脈吻合系での熱交換で体温を調節しています。

三鷹獣医科グループ・新座獣医科グループ 代表
日本動物病院福祉協会認定の内科認定医
特定非営利活動法人、小動物疾患研究所 理事長 小宮山典寛